

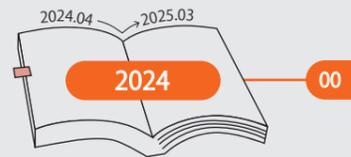
# 図書館学

昭和女子大学図書館学課程ニューズレター

Newsletter

## 小さな図書館

家庭文庫と大宅壮一文庫





## 「トモエ文庫」を始めた頃――

家庭文庫を始めたのは1981年の37歳の時。子どもは当時15歳・12歳・6歳、夫は公務員で、私は義母と二人で農業をしていました。私も結婚前は公務員として働いていたので、家で子育てと仕事をしながら、社会と関われるボランティア活動をしたいと思っていました。本と子どもの好きな私にぴったりな活動が、家庭文庫を主宰することでした。

実はその頃、何十年に一度という大きな台風に見舞われ、床下浸水の被害に遭うというピンチが訪れていました。そのピンチをチャンスに変え、家の建て替えをするとき、部屋を改装して文庫を始めました。名前は「トモエ文庫」としました。

当時、黒柳徹子さんの『窓ぎわのトットちゃん』がベストセラーになり、本の中で紹介される自由な空間がトモエ学園だったということ。我家の近くに流れていたのが「トモエ川」で、小学校の学年をまたいでの自由な縦割り活動が「トモエ活動」と呼ばれていたこと。そこから自由で年齢を超えて交流できる場になればいいなと思って迷わず名前を決めました。

その時、こんなことを  
漠然と考えていました。

- ・家庭でも学校でもない第3の評価しない場
- ・昔から居付きの住民と新住民の交流の場
- ・子どもたちにひとつでも楽しい思い出を
- ・本からも生活体験からも～多様なモデルとの出会いの場
- ・わが子の幸せは地域の子どもが幸せがあつてこそ

私は童話を書いていましたので、童話を書く上で、頭の中でなく実際の子どもの悩みや喜びを知りたいとも思っていました。又、幼少時に良きモデルとの出会いがありました。故郷(今の牧之原市)の筋向かいのビタミンB1発見者の鈴木梅太郎氏の生家に住んでいた5歳年上の美也子ちゃん。

近所の子どもたちを集めて本を読んだり、ハイキングやままごと等自然を愛でる遊びに誘ってくれました。親も知らない場所と空間で宮沢賢治の文学をシャワーを浴びるように耳から聞いていたのです。

## 家庭文庫の44年

トモエ文庫 主宰  
草谷桂子

子ども時代に近所のお姉さんにたくさん本を読んでもらってきたので本好きになりましたので、今度は、私が近所の子ども達に本のよさを伝えたいと思いました。

当時は周りに田畑があり、ザリガニやダンゴムシを持ち込む子もいたし、ままごと、ゴム飛びやボール投げ、基地作りなど、文庫でも様々な遊びをしていました。たいいていの子は本読みや工作にあきると外遊びをし、遊びに疲れると部屋に戻り本を読んだり宿題をするという具合に、上手にバランスをとりながら文庫時間を楽しんでいました。お楽しみ会には百名を超す子ども達が土と太陽の香りを漂わせて集まったものです。

## 家庭文庫の実際――

地域の皆さんの支援をいただきながら、子ども笑顔と本に出会える幸せを大事にしたいと思ってきました。ですから、

- ・主宰者は場所と空間の提供者 子どもと親と本が主人公 主宰者の自己実現の場ではない
- ・子どもに読書や本を手渡す目的はあっても、強制しない あるがままを受け入れる
- ・来る者拒まず、去る者追わず
- ・楽しい空間に本があるという位置づけ すぐに効果を求めない
- ・公共図書館の発展につなげる目線を大切に

と、心がけています。

「公共図書館の発展につなげる目線を大切に」についてももう少し詳しく触れてみます。文庫は、あくまでも公共の仕事の隙間を埋めるものです。もし、「文庫があるから公共の図書館はいらない」となったら、文庫をしていることがマイナスになります。

- ・いつできなくなるか分からない 永遠に続く保証はない
- ・専門知識の勉強をしていないから、バランスのいい選書ができない
- ・本の数と種類に限界がある
- ・いつでも開いているのではない
- ・レファレンス\*が出来ない (\*調べ学習の対応・読書相談)

などの理由から、限界を自覚しながら、文庫主催と共に、公共図書館の充実のための活動をしてきました。

文庫では、子どもの本の貸出は勿論、素話、絵本読み、紙芝居、パネルシアター、手遊び、コンサート、お茶とお琴を楽しむ会、手品、科学遊び、お餅作り、流しソーメン、ジャガイモ掘りや枇杷採りなど、子どもが喜びそうなことは負担にならない程度の範囲で何でもしてきました。「つかず離れずの適度な距離感で子どもを見守る」「子どもは自由を保障された中で、お話や絵本を楽しむ」を常に頭の片隅に入れてきました。

私の文庫は「読書」というより「居場所」の要素が多いといえます。文庫では外で遊んでばかりの子が、学校図書館では常連だったりします。「本と子どもの好きな大人がいて、本がたくさんある場所に行ったことがある」だけでいいのです。その体験が、何かの判断になる日が来るだろうと、気長に続けてきました。



## 好きな本がある幸せ――

Yくんは、小学校1年生の時に母親に連れられて来ました。「落ち着きがなくて・・・」と母親が嘆き始めた時には裸足で玄関の花壇のレンガの上を歩いていました。「元気が一番!」とお手伝いの方たちと大笑いして迎えたものです。

殆どの子は庭で遊んでいても「本を読むよ～」の一言で集まりましたが、Y君は絵本にはあまり興味を示さずお話会にも参加しなかった子でした。

ある時、Y君が、「はだか・・・はだか」とつぶやきながら本棚から裸の絵を探しています。

裸? そうだ! あの絵本だ!「この裸の子、Y君にそっくりね」私は素知らぬ顔で、居

合わせた子どもたちに『おふろだいすき』(松岡享子作 林明子絵 福音館書店)を読み始めました。遠くからちらちら見ていたY君は、次第に引きよせられるように近づき、やがて身じろぎもせずに絵本の世界に入っていました。子どもに本が好きになる瞬間があるとすれば、まさにあの時です。その瞬間に立ち会えたことは文庫のおばさん冥利に尽きました。

その日、その本は彼の大好きな一冊になったようで、早速借りていきました。その後も借りたり返したりを繰り返し、文庫にくるとまず『おふろだいすき』の絵本をさがし、見つけると「あつた～」と嬉しそうに報告してくれました。彼の読書体験は少しずつ広がり、外遊びと両立していきました。

Yくんにはしばらくぶりに会ったのは、彼が専門高校生だった頃です。スーパーで出会った彼の母親が、「アッシーで駐車場で私を待っているから会って行って!」と教えてくれたので駐車場に行きました。彼は細かい字の文庫本を読んでいた。めがねをかけた立派な文学青年の風情でした!

## 子どもは たくさんの顔を 持っている――

文庫をしていていつも思うことは「子どもはたくさんの顔をもっている」ということです。1人で来るときと親と一緒にの時と違います。友だちも、誰と一緒にかで表情が違ってくる顔があるものです。

文庫を始めた頃、その事にすぐ気がつき、以来自分の子ども(当時から小学生)の担任との面談には、「親の知らないところで悪いことしているかもしれませんが・・・」の一言をつけ加えるようになりました。

子どもを愛すると言うことは「いい子だから愛する」のではなく「悪いこともしてい

るかもしれないけれど、その成長を信じて丸ごと愛する」のだと思ったものです。数年経った頃ですが、文庫が終ってから帰らない小学校3年生の女の子がいました。帰宅を促すと「まだ親が帰っていないからいいの!」と答えます。暗くなると怖いのでよく車で送っていきました。

彼女がある日、手作りの絵本を作ってくれました。題は「つみきのおしろはふつつのおしろ」で、字も絵も上手とは言いがたいけれど、伸び伸びと自由でカラフルなマーカの絵がついていました。「すこ〜い!」と褒めて内容を見てびっくり!

お姫様は親の借金が返せなくて、悪いお金持ちにもらわれたらしい。さらに離婚して自分の子に会いたくてお姫様に変身していたらしい。あまりに現代風で、複雑な人間関係のストーリーについていけなくて絶句している私に、彼女はあっけらかんといったのです。「おばさん、これパネルシアターにして!!」

裏表紙には「あたらしい本がでました。かんそうをおよせ下さい。つぎの本は、どんなキャラクターがいいですか?」と書いてあるではありませんか。その本はちょっと手が届きにくい文庫の棚に置きました。彼女のおかれている環境は詳しくは分かりませんが、たくましく生きていることに安堵しました。

彼女のように親は文庫に来ていることを知らないケースもたくさんありました。いじめられっ子が、私の家の電話で「子どもSOSライン」で悩みを話したこともあり。不登校の子にも複数関わりました。

昔はむしろ文庫のない日に学校や家庭のことで悩みを持っている子がふらりと寄ってくれましたが、今は親と一緒に参加が多いのでありません。生きづらさを抱える子ども、どこかで大人の誰かにSOSしていることを願っています。

## 子ども達が 書いてくれた ポスターから

ここでご紹介する言葉は、私の文庫に来た子どもたちが勝手にポスターに書いてくれた言葉です。私は基本的に「本を読めばどんな効果があるか」というような教育的な言い方は子どもにしません、子どもの方で全てわかっているように思います。

### ・「本は心の栄養」

体が健康で病気になるために食べ物としての栄養は欠かせませんが、心を豊かに成長させてくれるのは本であるという観点で、読書の役割を伝えてくれています。

### ・「トモエ文庫でなかよくしよう」

味わい深い言葉といえましょう。本を読むことはきわめて個人的な行動ですが、本のあるところはひとのあつまる「広場」でもあります。本を介して多くの大人と子ども、あるいは子ども同士の会話が生まれるところ。本の感想や情報を言い合う楽しさは、豊かなコミュニケーションの一つで、本を読む喜び、生きる喜びを共有できるものです。

### ・「絵本を読んで夢の国へ」

本でファンタジーに入る喜びを言っていると思います。子どもといえども、日常生活の中にたくさんの困難や悩みがあります。厳しい現実からちょっと離れて本を読む時間があることは、いつか困難を忘れる癒やしの時間になり、この豊かな時間を体験し心をリセットできるからこそ、厳しい難局にも立ち向かえるのかもしれない。



私は、よく本を読むことを港に例えます。厳しい航海を終えて港に戻った船は、燃料を補給し、壊れた場所を修理し休息して元気になる、再び荒海に航海する力を蓄えます。この生きぬく力を蓄える時間と空間が読書の時間で、その港と言えるのが本があって、子どもを大切に思う大人がいる場所だと思えます。

因みに児童文学者で「かつら文庫」創設者の石井桃子氏は、こういう言葉を残しています。

子どもたちよ  
子ども時代を しっかりと  
たのしんでください。  
おとなになってから  
老人になってから  
あなたを 支えてくれるのは  
子ども時代の「あなた」です。



## これからのこと

昨年の夏には、何度も文庫でかき氷をしました。店長は家から機械や氷や蜜を持参してくれた小4の女の子。リクエストに応じて毎回、氷で暑さをしのぎました。本を中心に据えながらも、お手玉遊びや折り紙、庭でボール投げなど、自由に過ごす時間も大事です。

もともと家庭文庫は「交流の場」と考えていました。新興住宅地にある私の文庫も、昔から住んでいる住民と、新しく越してきたり転動してきた人達が自然に混じり合う場所でありたいと思っています。近隣の友人達に「ゆくゆくは、文庫を老人達の居場所にしてね」と頼まれていました。「ポケの里」って名前までつけて楽しい老後を想像していたものです。

いよいよ時機到来！ そこで、コロナ禍最中の令和3年2月より毎月1回「トモエ文庫大人のための朗読会」を始めました。講師は隣町に住む朗読ベテランの友人で、参加者は近所の友人を中心に、仕事や地域活動の仲間、夫の友人・知人など多彩な20名ほどです。

会場は換気がよく、廊下と台所も使えて高齢者用の椅子が多く用意できる居間にしました。片付いているわけではなく日常生活の延長ですが、適度な散らかり具合は居心地がいいはず。と勝手に肩の力を抜き、まずは私自身が日常を忘れて、毎月様々な作家の様々なジャンルの個性豊かな作品世界を旅しています。

最初に朗読して下さった講師が体調を崩してから、次々に協力者が現れ、幸いなことに10人くらいの方が順番で自分の好きな本を朗読して下さいました。本を通して日常でない空間を共に過ごしている聞き手の参加者にも、不思議な連帯感が生まれているように思います。「文学」の力です。

子どものための文庫も、大人のための朗読会も無理のないように平穩に続けることができる体制で、回数を減らしたり休んだりしながら続けていけたらと願っているこの頃です。



草谷 桂子 くさがやけいこ

子どもと本と図書館に関わり44年。ジェンダー、3、11、図書館、平和、子育てを主テーマに書評・絵本や童話、エッセイを執筆。趣味は、野菜やハーブの栽培、着物を小物や洋服にリメイクする洋裁、映画鑑賞、ユーチューブでヨガ、ズンバを楽しむ健康おたくの81歳。

## 家庭文庫とは

草谷先生が44年もの長きに亘って携わっておられる「トモエ文庫」は、「家庭文庫」にあたります。「家庭文庫」とはどのようなものでしょうか。「家庭文庫」が作られるに至った経緯を探ってみましょう。

日本の児童サービスは20世紀の初め急速に発展しましたが、第2次世界大戦の影響を受け、1930年代後半以降公共図書館は縮小・閉鎖となり、児童サービスのみならず図書館サービス全般が縮小されます。1945年の終戦を迎えるとGHQ(連合軍総司令部)は、占領政策の一環としてCIE(民間情報教育局)図書館を日本各所に設立しました。その目的は、米国型の公共図書館を中心とする社会教育を日本へ啓蒙することでした。CIE図書館では絵本や児童書の貸出だけでなく、紙芝居やおはなし会も行われ、戦後日本の児童サービスの先駆けとなりましたが、その普及にはなかなかつながりませんでした。

このような状況の下、1950~60年にかけてまだ図書館が整備されていない地域での子どもたちの読書環境を整えるために「子ども文庫」が始まったのです。「子ども文庫」とは、個人やグループが自由に設置し、児童図書を集め、地域の子どもたちに児童図書の貸出、読み聞かせ、おはなし会などを行っている小規模図書館<sup>1)</sup>のことをいいます。自宅を開放して、個人所有の児童書等を貸し出す「家庭文庫」と公民館などの公共施設の一室を借りて活動する

「地域文庫」の2種類にわけることができます。これらの文庫活動は、戦後の公共図書館の設立や児童サービスの普及につながります。

草谷先生が「トモエ文庫」を始められたのは1981年とのことですが、筆者が子どもの頃自宅近くに「トモエ文庫」があったならば、どんなによかったらうと思いました。「私の文庫は『読書』というより『居場所』の要素が多いといえます。」と草谷先生が書かれているように、きっと筆者にとってのサードプレイスになっていたに違いありません。

1) 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会『図書館情報学用語辞典』第5版、丸善、2020、p.78.



池田 美千絵 いけだ みちえ

世田谷区立下馬図書館との連携で、本の病院ワークショップ2022・2023、世田谷ふしぎの本プロジェクト2023、サンタさんのおくりもの2022・2023、選書体験を担当した。本学現代ビジネス研究所認定プロジェクトであるさわる絵本プロジェクト2022・2023も担当した。



## 専門図書館 大宅壮一文庫

事務局次長  
鴨志田 浩

### はじめに

図書館というまず自治体立の図書館、次いで大学等の学校図書館を思い浮かべる方が多いと思います。しかしそれ以外にも専門図書館というカテゴリがあり、それは様々な分野に特化した図書館、公益法人や企業を母体とする資料室、行政がある分野の情報の普及を目指して設置した施設などです。これらの連絡団体である専門図書館協議会の2018年の調査によれば1645機関を数えます。

公益財団法人大宅壮一文庫はその専門図書館であり、書店等で市販されている雑誌をコレクションの中心にした図書館です。

### 大宅壮一文庫の沿革

昭和期に活躍した評論家・ジャーナリストの大宅壮一（1900-1970）は、新聞や雑誌での執筆はもちろん、ラジオ・テレビにも出演し「マスコミ四冠王」と呼ばれていました。その旺盛な活動を支えていたのは自ら資料を収集、索引を整理した「雑草文庫」と称した資料室でした。自宅の一隅に専用の書庫を建て、専任のスタッフを雇用していました。自らの取材や執筆に使うのみならず知己の作家やジャーナリスト、編集者にも開放して使わせていました。

当時からこの資料室は有名で、これに関したインタビューも数多く残されています。その中で大宅壮一は「書物に貴賤はない」とし、雑本雑誌の類も差別せず所蔵資料として扱っていました。その一方書誌情報のみでは内容が読みだせない資料から情報を取り出すために、独自に索引の採録を始めました。「本は読むものではない、引くものだ」「一冊の本は百科事典の一項目に相当する…それを引く可能性があるかないかで、その本の価値が決まる…何万冊あっても全体で一冊の本になる訳だ」の言葉通り、試行錯誤の末に索引カードに記事内容を採録し、カードを収めたカードケースごとに項目分類を設定しました。

大宅壮一が亡くなった時「一個人一企業が私することなく、共有の財産にしてほしい」という遺志に基づき、財団法人大宅文庫が創設されました。雑草文庫の建物とスタッフがそのまま使われたのはもちろん、所蔵資料20万冊（うち17万冊が雑誌）と索引カード30万枚で立ち上げられました。

### 雑誌の図書館としての発展

開館当初からしばらくの間は利用者も少なく、スタッフと一緒に机で作業し食事やお茶が出されていたそうです。現在に至



るまで利用者のほとんどはマスコミ関係者でした。1974年、立花隆が『文藝春秋』誌上で時の総理大臣田中角栄の金脈に関する記事を発表し、その結果田中首相は退陣に追い込まれます。この時大宅文庫で資料を涉猟したという話が伝わって以来、一朝事あれば各マスコミがこぞって訪れるようになりました。大宅文庫はそんなジャーナリスト同士の情報交換の場にもなり、マスコミ共有の資料集積所となったのです。雑草文庫時代、大宅壮一が私費をつぎ込んで収集していた雑誌資料も引き続き出版元から寄贈を受け、古いものでは明治期の雑誌から、百年以上続いている（惜しくも休刊した週刊朝日や）『サンデー毎日』『中央公論』など、自治体立図書館では所蔵年限が限られている雑誌も創刊号からすべて揃っていることが多いです。

### 雑誌記事索引データベース「Web OYA-bunko」へ

大宅壮一文庫のもう一つの特徴である雑誌記事索引は、カードからデータベースへと発展を遂げます。1985年に索引カードを人名・件名の分類ごとに収録した『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』が刊行されました。この目録は全国の公立図書館や学校図書館、マスコミなどで重用され、東京都世田谷区の大宅文庫に来館するこ



となく雑誌記事資料を探すことができ、原記事が必要ならコピーを取り寄せることが可能になりました。さらに1988年から専用のコンピューターを導入しデータ入力を開始、カードや目録を使うのではなくデータベースで検索ができるよう準備を始めました。ホストコンピューターを導入し館内に設置した専用端末で検索結果を提供、この間目録はCD-ROMメディアを変えてリリースし、2002年からついにインターネットを介してのデータベース利用を開始します。

今でこそネット検索やデジタル化による全文検索などで雑誌に書かれた内容を探し出すことは容易ですが、例えば戦後から90年代頃までの情報を探し出し、原資料へのアクセスを可能にしているのは大宅文庫ならではの特長です。いくつか雑誌記事索引データベースはありますが、大宅文庫では担当者が原資料を表紙から裏表紙まで一記事ずつ確認します。特集記事内の小特集や囲みコラム、連載エッセイなど目次に現れない内容も索引化します。

記事タイトルやインタビューを受けた人物、事件名、執筆者以外にもタイトルからは判らない内容をキーワード（検索タグ）によって絞り込んだり、独自分類の項目カテゴリを使って調査テーマを幅広く検索することが可能なシステムです。検索システムにつきましては大串夏身先生

が折に触れご紹介くださっておりますし、ご著書にもお役立ていただいております。

### 公益財団法人としての運営と支援組織パトロネージュ

大宅壮一文庫は公益財団法人として運営しています。この形態の場合母体となる企業・団体により運営費が賄われていることも多いです。しかし大宅文庫は個人・法人の賛助会員より会費収入というご寄付をいただいておりますが、これまでほぼ利用収入のみで運営してきました。ところが1997年頃をピークとして雑誌の推定販売額が下降を続けており、また折からの出版不況でマスコミによる利用自体も減少する一方です。さらにネットでの情報収集が容易になったことで、費用をかけてデータベースを検索、資料を複写する機会はさらに減っています。

この状況を改善すべく、2017年にクラウドファンディングに挑戦し700人を超える方から850万円の資金を調達することに成功しました。翌2018年より大宅文庫の維持存続を目的とした会員組織「大宅文庫パトロネージュ」を発足させました。これよりはデータベースの利用契約収入とパトロネージュを中心とした寄付を運営の柱にしていかなければなりません。司書資格を取得してこれから図書館界に入っていき皆さんには是非専門図書館の維持運営とい

うことを心に留めていただきたいと思います。

### 大宅文庫のこれから

大宅壮一が亡くなって半年後の1971年に財団法人として発足して以来、大宅壮一文庫は半世紀にわたり様々な利用されてきました。これからさらに次の50年を見据えて活動を続けていきます。ネット情報を中心に誰もがより多くの情報を安価に収集できる現在ですが、大宅壮一が私費をつぎ込み誰もが振り向かなかった資料の蒐集を行い、索引を考案・整備することでテーマ別の情報収集を可能にしたこの貴重な文化施設を次の時代へと必ず繋いでゆきたいと考えています。



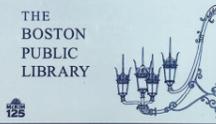
鴨志田 浩 かもしだ ひろし  
京都出身。日本ジャーナリスト専門学校卒業後、大宅壮一文庫で30年以上勤務を続ける。現在事務局次長。様々な図書館の雑誌の所蔵状況と商用データベースの導入状況に関心を持つ。

## ボストン公共図書館の第一印象

私は英語コミュニケーション学科のカリキュラムで、2023年の後期にボストン留学に行きました。ボストン公共図書館は私のボストンで一番お気に入りの場所です。今でも、初めてボストン公共図書館に足を踏み入れたときの衝撃は忘れられません。入ってすぐに目に入ったホールが荘厳で美しく、まるでヨーロッパの宮殿のようでした。私は、こんなに素晴らしい建物が公共図書館でいいのか?という感動と疑問で混乱しながらも、来て一回目でボストン公共図書館に惚れてしまいました。

## ボストン公共図書館 体験記

英コミ3年  
星野名菜



## 司書の方のツアー

一人でも友達とも何度も訪れましたが、リーディングの授業の一環でボストン公共図書館に行くこともありました。その日の授業予定は、司書の方の図書館のツアーと図書館の利用者カードを作ることでした。海外の図書館のカードを作るのは初めての経験で、とても嬉しかったことを覚えています。ツアーの後、私が司書の方にアメリカの図書館について質問したいと言うと、快く承諾してくれました。私は当時ボストンに来たばかりで、自分の英語にあまり自信がありませんでした。それでも司書の方は私の話を耳を傾けてくださり、難しい単語なども分かるように丁寧に説明してくださいました。



海外の図書館で実際に働いている司書の方とお話できるとも貴重な機会でした。今は前よりもっと上手く伝えられると思うので、またお話ししたいと思います。担当して下さった司書の方、本当にありがとうございました。そして、授業でボストン公共図書館に連れて行ってくださった先生にも感謝しています。



星野名菜 ほしの なな

国際学部英語コミュニケーション学科3年。留学中ホームシックになり、つらい日々を過ごす。しかし、寮にあった日本語の小説を読むことで寂しさを誤魔化した。他の棟からも本を集めだし、そこで初めて横溝正史の「犬神家の一族」を読んだ。

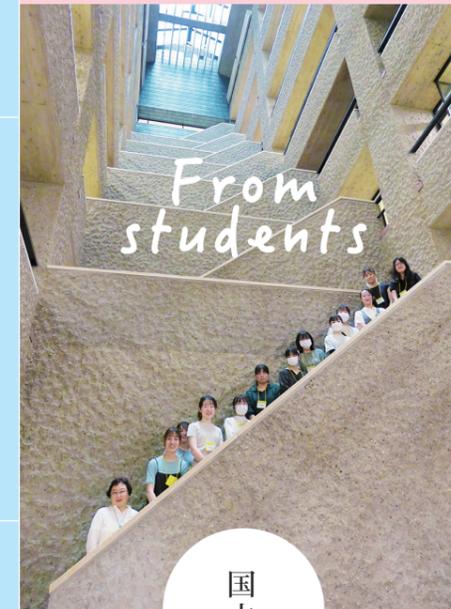
国立国会図書館は地下7,8階に新聞が保管されているスペースがある。国立国会図書館の職員さんが明治時代の新聞を持ってきてくださった。明治10年の『郵便報知新聞』は西南戦争についての記事があり、第29代総理大臣の犬養毅が書いた記事があった。犬養毅が元々レポーターだったことをこの資料で知り、非常に驚いた。歴史の教科書に載っている人物の資料は中々見ることができないため、貴重な体験ができてとても良かった。(A・K)

新聞は資料として使われるイメージがあったが、よく見てみると、今と変わらないような広告があったり、逆に今では考えられないような内容の記事や絵が挿入されていたり、非常に面白かった。それだけでなく、視点を変えればさまざまな分野の研究に生かすこともできる。たくさんの国、出版社、様々な年代の新聞を膨大な広さの書庫に納めている図書館に秘めた情報の大きな可能性を感じた。(日本語日本文学科1年・対馬花咲)

国会議事堂がすぐ側にあり、その近辺では国会議事堂よりも高い建物を作ってはいけないという決まりがあるため、国会図書館は地下に書庫がある。東日本大震災の際、地上に置いてある蔵書は棚から崩れ落ち、足の踏み場がないほどであったのに対し、地下書庫にある蔵書は一冊も落ちていなかったという話を聞いた。地上に高い建物を建てられないというマイナスな面がプラスとなったことに大変驚いた。(歴史文化学科・内海春香)

国立国会図書館は納本制度に基づき、図書等の出版物を国民共有の文化的資産として保存して、後世に継承するという重要な役割がある。年々所蔵数が増えているため、これまでに蔵書施設の増築や資料を移動するなどの所蔵方法の工夫に取り組んできた歴史がある。私たちが歴史的に貴重な資料を閲覧し、研究のために利用できる背景には、国立国会図書館が数多くの出版物や史料を保管してきた長年の努力が深く関係していると実感した。(現代教養学科・相崎日菜子)

今回の見学を通じて、図書館に携わる以上、様々な図書館業務について積極的に学んでいく姿勢を忘れてはならないのだと深く理解できた。授業を聞いたリインターネットで調べるだけではなく、実際に図書館に赴き、自分の目で見て、直接話を聞くことで新たに気付くこともあった。この経験を忘れずに、今後の図書館学課程に取り組んでいきたい。(日本語日本文学科1年・永峯愛子)



## 国立国会図書館 体験記

ここまで多種多様な資料を揃えているのは、資料の価値は利用者が決めるからであると職員の方から聞いた。例えば、求人雑誌からは男女雇用機会均等法以前の求人やその当時の給料を知ることができる。そのほか、長く歴史のあるものは調査研究の対象にもなる。国立国会図書館は、利用者のあらゆる学びや調査と研究に差別をつけず、その多種多様な研究のために色々な資料を収集し、保存や整理などの管理をしている。(A・H)

普段は入れない地下書庫には、ゲームも資料として所蔵されている。職員の方の話によると、音楽資料や映像資料と同じく、あくまでも研究のための閲覧しかできないようになっており、そのための審査はかなり厳しいのだそう。通常は娯楽として消費される映像資料やゲームも図書館の資料として所蔵されていることに驚いた。(Y・M)

地下の書庫では、地下最下層まで外光が届くように光庭が設けられている。それには、地下で働く職員たちの精神衛生を保つためであることが大きく関係している。このことを知り、自然の光は人間にとって必要不可欠なものだと改めて実感した。(M・M)

国立国会図書館の資料の保存・管理方法に驚いた。本の貸し出しには、資料を安全に保存するための特徴的な仕組みがたくさんあった。まず、探すためには自分で本を手取るのではなく、書籍情報を検索して図書館職員に探してきてもらう仕組みになっている。そのため、待つスペースが広く設けられており病院の待合室のようだった。(H・U)

国立国会図書館では紙の資料を複写する際、係の職員が手作業で行っている。一般的に本のコピーを取るとき、本の折り目近くの文字まで綺麗に写そうとする。しかしこの時、見開きの状態にした本に力を加えることになり、大きなダメージを与えてしまう。これを防ぐために国立国会図書館では、本へのダメージを最小限に抑える方法で、時間をかけて職員が丁寧に複写を行っているのだ。(H・N)

国立国会図書館は閉架制だが、自習や研究等、利用者が多いことに驚いた。広いスペースで、集中出来る空間が保たれていたことが印象に残っている。図書館職員の多さにも圧倒された。本の返却時、ベルトコンベアーを使用して本を書庫に戻す作業を6.7名で行っており、大変な仕事だと感じた。実際に働いている職員の方にもお話を聞いてみたい。(日本語日本文学科2年・小川遥音)

司書資格取得者数・司書教諭単位修得者数

		令和3年度卒業生		令和4年度卒業生		令和5年度卒業生		令和6年度卒業生	
		司書	司書教諭※	司書	司書教諭※	司書	司書教諭※	司書	司書教諭※
人間文化学部	日本語日本文学科	41	2	23	6	20	2	21	1
	歴史文化学科	25	0	9	0	9	1	8	0
人間社会学部	心理学科	10	0	4	0	4	0	7	0
	福祉社会学科	0	0	0	0	0	0	0	0
	現代教養学科	13	0	4	1	6	0	3	1
	初等教育学科	1	12	0	11	2	8	0	11
生活科学部	環境デザイン学科	0	0	0	0	1	0	0	0
	健康デザイン学科	1	0	0	0	0	0	0	0
	管理栄養学科	0	0	0	0	0	0	0	0
グローバルビジネス学部	食安全マネジメント学科	1	0	0	0	2	0	0	0
	ビジネスデザイン学科	1	0	0	0	0	0	1	0
	会計ファイナンス学科	0	0	0	0	1	0	0	0
国際学部	英語コミュニケーション学科	2	1	0	0	5	0	0	0
	国際学科	0	0	0	0	0	0	1	0
大学院		0	0	0	0	0	0	1	1
合計人数		95	15	40	18	50	11	42	14

※司書教諭は、単位修得済みの資格取得見込者数。 R4.3.16時点 R5.3.16時点 R6.3.16時点 R7.3.16時点

図書館学課程科目履修者延べ人数

		令和3年度履修生		令和4年度履修生		令和5年度履修生		令和6年度履修生	
		前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
人間文化学部	日本語日本文学科	233	183	209	194	216	252	238	284
	歴史文化学科	136	70	96	110	77	128	46	158
人間社会学部	心理学科	51	36	35	35	44	38	39	29
	福祉社会学科	7	1	2	1	0	1	1	0
	現代教養学科	47	38	36	32	21	28	20	21
	初等教育学科	43	23	46	15	30	20	27	30
生活科学部	環境デザイン学科	13	6	9	6	7	3	4	1
	健康デザイン学科	0	2	0	2	2	3	1	3
	管理栄養学科	2	0	0	0	0	0	0	0
	食安全マネジメント学科	2	2	8	11	10	4	7	5
グローバルビジネス学部	ビジネスデザイン学科	5	0	2	7	6	13	7	4
	会計ファイナンス学科	4	3	6	8	6	10	11	11
国際学部	英語コミュニケーション学科	18	3	18	39	34	15	22	18
	国際学科	4	8	23	2	3	7	12	9
大学院		0	0	0	0	1	3	1	0
合計延べ人数		565	375	476	462	457	525	436	573

※ひとり関係科目を2科目履修した場合は2名とカウント

「資格取得者数」が昨年度に比べ若干減少した。しかし、履修者の延べ人数「後期」は昨年に引き続き、増加している。司書・司書教諭資格取得をめざす学生が増加していることは、喜ばしいことである。

コロナ禍での中止から、昨年度より再開した「国会図書館見学」。そして「国際子ども図書館見学」も例年通り開催した。履修初年度の学生だけでなく、卒業年次生も積極的に参加していた様子が見られた。

学内での学びはもちろんのこと、実際に図書館に行かなくてはわからないことがたくさんあり、それらに触れられる大変貴重な機会であったことに違いない。特に、一般利用者が立ち入ることのできない書庫では、「蔵書を管理する」ことについて、まさに肌で感じた経験だったのではないかと。

図書館そのものを見学できたことだけでなく、「図書館で働く人」と接することができた点は非常に大きい学びとなった

はずだ。蔵書を管理する人、複製作業をする専門の人、カウンターで利用者と話す人。一口に図書館で働く人といっても、様々な人がいることを知るきっかけになったであろう。実際に足を運んでみるこの大切さを実感したのではないかと。司書・司書教諭の資格取得をめざす学生として、これらの経験がこれからの学びへと大いに広がっていくことを切に願う。

(星野智美)

編集 池田美千絵 星野智美 川口華織  
デザイン 鷲野宏デザイン事務所  
2025年3月31日発行(年1回発行)  
昭和女子大学図書館学課程  
東京都世田谷区太子堂1-7-57  
昭和女子大学日本語日本文学科内